研究プロジェクト紹介 1

依存症に関する総合的研究

船橋新太郎（こころの未来研究センター教授）
Shintaro Funahashi

物質依存と過程依存

依存は、物質依存と過程依存の2種類に大きく分類されている。アルコール、覚せい剤、シンナー、ニコチンなどの薬物に対する依存は物質依存の代表的なものであり、特定の物質に対する欲求が異常に亢進した状態である。依存症と言えば一般的には薬物依存を思い起こさせる。薬物依存の生物学的なメカニズムについては、膨大な数の研究結果が蓄積されており、主として脳内に存在するモノアミンやカテコールアミン系の機能異常により説明されている（詳しくは松岡俊行氏の解説*1を参照）。薬物依存の恐ろしさや危険性はいろいろなメディアを介して紹介されており、また薬物依存からの回復プログラムも多くの病院や施設で提供されている。

一方、様々な新しいメディアや機器の登場とその急速な普及により、携帯電話依存症、ゲーム依存症、ギャンブル依存症など、様々な新たな依存症が生まれている。これらの依存は過程依存に分類され、特定のものに対する欲求の亢進ではなく、特定の行為とその結果に対する欲求の亢進である。薬物依存などと同様に、新しい機器やメディアを利用して楽しむ段階を越えて、それなしでは日々の生活を円滑に営めないだけでなく、それによって自己の生活を破滅させる例が見られている。携帯電話、ゲーム、インターネットなどへの依存はまだ大きな社会問題となってはいないが、パチンコを中心としたギャンブル依存は大きな社会問題となっている。

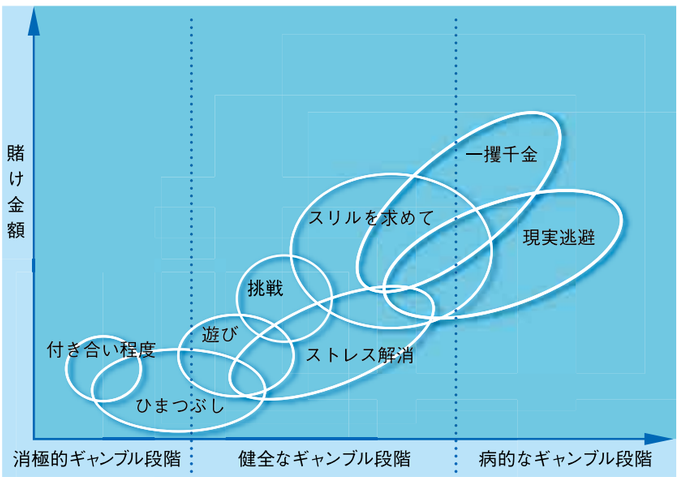


図1　ギャンブルに対するはまり度、賭け金額と、内面的動機との関係
（谷岡一郎『ギャンブルフィーヴァー：依存症と合法化論争』p. 40の図1を一部改変）

ギャンブル依存症

ギャンブル依存に関する欧米での調査では、成人人口の1～2%がギャンブル依存症と言われ、その数字を日本の人口にあてはめると200万人近い人たちがギャンブル依存症と推定されている。日本では競輪・競馬・競艇などの公営ギャンブルに加えて、民間業者の経営するパチンコ店が国内の至る所に存在し、ギャンブル依存の原因の大部分はパチンコによるものであると言われている。ギャンブル依存は、それが病的で、社会生活上問題を生じるようなレベルになると（たとえば、返済可能性を大きく越える借金、失業、離婚、家庭崩壊など）、単なるギャンブル好きではなく、精神疾患の1つとしてのギャンブル依存症と呼ばれるようになる。

図1は谷岡による病的なギャンブル依存への道筋を示したものである*2。最初は遊びやひまつぶしやストレス解消のためにしていたギャンブルが、一攫千金を求めて行うようになると、病的なレベルに限りなく近づいてしまう。病的なギャンブル依存の診断の決め手として、常にギャンブルが頭から離れない、賭け金を増やさないと満足できない、やめようと思ってもやめられない、やめているとイライラする、ギャンブルで使うお金を得るために他人のお金に手を出す、あるいは違法行為をする、ギャンブルのために仕事を放り出す、ギャンブルをしていないと嘘をつく、などが挙げられているように、ギャンブル依存症の人の行動は薬物依存症の人の行動に酷似している。

ギャンブルに対する依存は、薬物に対する依存とは別の新たな社会問題であり、これを放置することにより大きな社会的損失が生じることになる。したがって、このような依存症がどのような仕組みで生じるのか、薬物依存と同様のメカニズムが関わっているのか、どのようなプロセスを経て重度の依存症に至るのか、重度の依存症から抜け出すにはどのようにすればよいのか、重度の依存症の人に対してどのような支援が必要なのかなど、ギャンブル依存症に関する基礎的・臨床的研究の推進とともに、その防止と改善のための対策の立案が急務である。そこで本連携プロジェクトでは、ゲームやギャンブルに対する依存症の生物学的な要因に注目し、このような依存症に陥る仕組みに関する基礎的な研究を実施することを計画した。

ギャンブル依存症に関する研究

研究の実施にあたっては、まず依存症に関する社会的な問題や既知のメカニズムを明確にする目的で、平成18年（2006）より研究会を開催し、福井裕輝氏（国立精神・神経センター）からは薬物依存の神経基盤について、松岡俊行氏（京都大学）からは依存症の薬理学的側面について、また、谷岡一郎氏（大阪商業大学）からはギャンブル依存の社会的問題点について、村上幸史氏（神戸山手大学）からはギャンブラーの賭け行動の特徴について、話をうかがった。また、平成19年（2007）には「依存症を知る」と題するフォーラムを開催し、精神医学、神経科学分野の研究者とともに、依存症の生物学的要因や社会的な問題の理解と、その防止と改善への取り組みを考えた。さらに、平成20年には「依存と自立」というテーマでフォーラムを開催し、国内でギャンブル依存症からの回復施設を運営している中村努氏（ワンデーポート）と、米国でギャンブル依存症患者の治療にあたっているJames Whelan氏（メンフィス大学）を迎えて、ギャンブル依存症の診断・治療・支援の具体的な方法やその日米での考え方の相違、さらに、谷岡一郎氏を交えて、依存症研究の今後のあり方について討論を行った。

ギャンブル依存は大きな社会的問題であるにもかかわらず、それに関する基礎的研究はもちろん、臨床的研究も著しく少ないことが明らかになった。そこで、ギャンブル依存の生物学的メカニズムの研究の推進はもちろん、その治療法の確立に向けた研究を進める必要がある。一方、ギャンブル依存からの回復を支援する組織や施設の設置、また回復のためのプログラムの整備もほとんどなされていないことが明らかになった。そこで、このような精神疾患の存在に対する社会の理解と、それからの回復に向けた社会からの支援・救済システムの構築も必要である。人間のもつ欲望を制御し、皆が健全で充実したこころで毎日を送るためには、基礎科学・臨床科学と社会科学が一体になったこのような研究が必要である。

図2
こころの未来フォーラム『依存症を知る』のポスター

図3
こころの未来フォーラム『依存と自立』のポスター

参考文献

1　松岡俊行「『依存症：溺れるこころ』を探る」こころの未来、vol. 2、26-29、(2009)。

2　谷岡一郎『ギャンブルフィーヴァー：依存症と合法化論争』中公新書、(1996)。

研究プロジェクト紹介 2

ソーシャル・ネットワークの機能
――グループ内の「思いやり」の性質

内田由紀子（こころの未来研究センター助教）
Yukiko Uchida

対人関係は幸福の源になる反面、強いストレス源ともなりうることが、多くの研究により指摘されている。一見自明のことのようでもあるが、良い対人関係が主観的幸福感、病に対する対処行動、身体的な健康などと強く結び付いていることを示す研究報告から、社会の中で生きる人間にとっての対人関係は一種の「資源」であることがあらためて理解できる。これを、「社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）」として研究する動きはいろいろな研究分野で見受けられる。

本研究の最も大きな目的は、人と人とのつながりや、相手に対する「思いやり」がうまく機能する場面とはどういったものであるのか、「資源」として機能しているネットワークはどのような性質をもっているのかを探ることである。

普及指導員の役割

その中で現在特に着目しているのが農村コミュニティーのネットワークであり、そのネットワークの生成・維持に貢献している「普及指導員」の役割である。

昨年度、近畿農政局から、普及指導員という専門職の人たちが農村の中で果たしてきた役割について知ってもらいたい、という依頼があったことに端を発し、「普及指導員とは何か？」について勉強し始めることとなった。全国普及改良支援協会のホームページ (https://www.ek-system.ne.jp) には「普及指導員は、農業経営と農村生活の向上に取り組む農業者の様々な活動を支えています」とあり、その役割には地域の担い手の育成、産地のサポート、地域振興などのサポート事業が挙げられている。とりわけ、「普及指導員は、こうした産地を発展させたり、新たな産地を作るよう農業者等を仕向けたり、さらに地元の農協や市町村と連携して、農業者の組織化支援などのコーディネート活動を行っています」という記述には、普及指導という仕事が日本の農村コミュニティーにおいて人と人のこころを「つなぐ」役割を担ってきた職務であることが示されている。「人とのつながり」を資源として活かす専門家ということで、心理学の立場からこの仕事の持つ機能や意義に注目してゆくことになった。

近畿農政局の普及課の協力で、農業現場を訪れ、実際の普及指導員がどのようなビジョンをもって「つなぐ」仕事を行っているのかを知る機会があった。また昨年10月の普及事業60周年記念シンポジウムでは吉川左紀子センター長が「信頼形成のコミュニケーション：心理学の知見から」というタイトルで講演を行った。筆者もパネルディスカッションのコメンテーターとして参加し、近畿6府県の数多くの普及指導員の方々と意見交換を行う機会を得た。

2008年10月に行われた普及事業60周年記念シンポジウム
（提供：近畿農政局福田尚子氏）

農業を営む人たちや消費者に直接働きかけて、農村集落というコミュニティー集団への貢献意欲を高め、集団のメンバー間の信頼形成にも力を尽くす、ベテランの普及指導員のスキルは並大抵のものではない。本プロジェクトでの取り組みを通じて、普及指導員の人たちが長年経験を積む中で培ってきた、「人のこころを動かすスキル」を明らかにすることをめざしたい。現代の日本社会において、「つなぐ」仕事は学校や医療現場など、様々なところで必要とされており、普及指導員が持つスキルを解明し、またそのトレーニング法を開発することは、今後重要になるに違いないと考えるからである。

現在のプロジェクト実施状況

普及事業60周年記念シンポジウムの後、参加した普及指導員の方から、「普及指導員が行っている『つなぐ』仕事の役割を具体的に心理学のデータで示すことは可能なのだろうか？」という意見が寄せられた。「つなぐ」仕事の成果は、経済的効果などの尺度では計測できず、それゆえに地域の活性化や農村ネットワークの形成といった「こころの働き」についての実績は外に表しにくい現状があるという。一方、私の専門である心理学は、目に見えないこころの働きをデータで示すことができるところにその強みがある。文化心理学者として、日本社会・文化の基盤となっている農村コミュニティーのネットワークの成り立ちと、それを支える人々の役割に強い関心を持っていたこともあり、普及指導員の行っている仕事を目に見える形にすることをめざした連携プロジェクトを実施することになった。現在、近畿農政局と近畿ブロック普及活動研究会の協力のもと、近畿6府県の普及指導員を対象にウェブ調査を実施している。

今後の展望

今年度は近畿における調査結果をまとめ、まずは普及指導員やその組織が持っている資質、長所などが、実際の農業生産だけではなく、地域づくりなどにどのように活かされているのか、その成果を具体的なデータとして示すことを目標としている。さらに、近畿の普及組織で活用してもらえるようなデータ（普及指導員が持つスキルとその特徴についてのモデル化や、事例タイプ別の有効解決方法を明らかにするなど）をフィードバックすることを目指している。来年度は全国規模での調査を立ち上げることも視野に入れている。

普及組織へのフィードバックとともに、学術的な貢献も行っていきたい。具体的には、農村コミュニティーの社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）の役割と、日本の農村文化における対人関係の特徴などについて明らかにしたうえで、人のこころのつながりがどのように形成され、地域社会でどのような機能を果たしているのかを明らかにしていきたい。「農」という生業が日本の社会構造に果たす役割や、これまで直感的かつ素朴に理解されていた「相手からの思いやりを肯定的に受け取ることができる背景」とは何かという対人ネットワークに関連する視点、そして信頼を形成するためにはどのようにすればよいのか、というコミュニケーションについてのより詳細な理解を進めることを目指している。

このような研究プロジェクトは、「心理学に対する期待、要請」に対して、「学術研究を通じて解を見いだし、その成果をフィードバックする」という、こころの未来研究センターならではの連携事業の1つのモデルケースとなるのではないだろうか。ともすれば研究のための研究となりがちな中で、心理学に対する要望からヒントやアイディアを受け取り、それを学術研究として構成し、フィードバックを行うという形が、これからの心理学研究においても重要なフィールドとなることを期待している。

2008年8月、東近江市和南の池田牧場にて、滋賀県農業技術振興センター上田普及部長（当時）より説明を受ける（提供:近畿農政局福田尚子氏）

東近江市杠葉尾（ゆずりお）集落における和牛放牧　牛を借りてくる「レンタカウ」により、獣害が減るだけでなく、牛の世話のために人々が集まってくるという効果もあるという

研究プロジェクト紹介 3

〈モノ〉の表情・眼力の実証研究
――実験に至るまでの道のり

渡邊克巳（東京大学先端科学技術研究センター准教授）
Katsumi Watanabe

〈モノ〉にこころを感じるのは何故？

「こころを込める」という表現がある。国語の音読で「もっとこころを込めて」と言われれば、たいていの小学生は「もっと感情豊かに」読むということだと知っていて、かつそうすることができるだろう。ホテルのドアマンがこころを込めてドアをあけるときは、「相手のことを考えて」ドアを開けることによって、言葉や動作の質が上がるということが暗に示されている。発言や動作の主体が明示的なため、発話や動作のような〈コト〉にこころを込めるというのは分かりやすい。

しかし例えば、こころを込めた贈り物とか料理とは何だろうか？　相手のことを考えて選んだ・渡した贈り物／作った料理という側面は確かにあるだろう。しかし、そのような〈モノ〉は、こころを込めた主体が目の前に存在しなくても、また受け取り側に主体がはっきり分からなくても、さらには受け取り側が不特定多数でも可能である（ような気がする）点で、こころを込められた〈コト〉とは微妙に異なる。こころを込める主体から離れた〈モノ〉に何か変化がある（ような気がする）。

ココロを込めた〈モノ〉は質が変わるかという問いはともかく、ヒトは〈モノ〉にこころを込め続けてきた。あるいは受け手は〈モノ〉にこころが込められていると感じ続けてきた。このような凡庸な直感は、センターのプロジェクトの1つである「京都における癒しの伝統とリソース」に参加するなかで、〈モノ〉にまつわる様々な歴史や縁起の知識を、河合俊雄先生、鎌田東二先生、吉川左紀子先生、駿地真由美先生などから詰め込まれたことによって強くなり、「〈モノ〉にこころを感じるのはなんで？」ということになった。

仏像の多様性
左上　八臂弁財天像（長建寺蔵）　右上　洞の地蔵（法然院蔵）
左下　十一面観音菩薩像（法金剛院蔵）　右下　阿弥陀如来坐像（法然院蔵）
（撮影：水野克比古）

〈モノ〉の力に対する実証的な検討

さて何から始めるべきか。一応自分の専門の認知科学・認知心理学の範囲でやるためには実証研究じゃないと。あとは調べる範囲も限定するほうがいい。京都だし仏像なんかどうだろう？　仏像に感じるココロの研究？　まだ広いなあ。それに深すぎる。戦略的な浅さが欲しい。じゃあ〈モノ〉としての仏像の視線とか表情ってことでどう？　あ、それで行きましょう。……というような議論（？）がプロジェクトに関わる人たちのなかで交わされ、「仏像等に代表される〈モノ〉に転写したものとしての表情・視線の研究を、人間の認知の基礎的研究の立場から分析することによって、心理的・宗教的・文化的な絆となりうる〈モノ〉の特徴を実証的に探る」というはなはだカッコイイ目的を持つ「〈モノ〉の表情・眼力の実証研究」が平成19年度からスタートした。

表情や視線の古典的な実験心理学には単純に検出・弁別を扱うものが多かったが、表情や視線を受ける側がどのような影響を受けるかという研究が、近年さかんに行われるようになってきた（共同注意や表情の伝播など）。しかし、表情や視線を統合することによって生まれる気配や持続的な魅力に関しては研究が少ない。この研究では、例えば「眼力」のような感覚が、観察者にどのように感じられているのかなどを調べるとともに、そのような感覚が仏像のような〈モノ〉に吹き込まれてきた過程などに関しても、実際の仏像やその縁起などとつきあわせることによって研究を進め、心理的・宗教的・文化的な絆となってきた〈モノ〉の力にたいして、実証的な立場から検討を加える。おお、それっぽくてカッコイイかも。

〈モノ〉にこころを込める行動は人類共通

でも目的がカッコイイことと、実際に研究を進めることは別な話である。研究を開始してすぐにぶつかった壁は、研究対象としての仏像の幅広さ・多様さ、および適切な視覚刺激としての仏像画像の不足であった。言葉は現実の多様さを隠蔽することがある。「仏像の表情・眼力」と言ってしまうことで、研究対象を限定したつもりになっていたが、狭さと浅さがまだ足りなかったのだ。さらに、実験に使う視覚刺激は「統制」されていなければならない。仏像を撮影する写真家の方々は、なぜあんなに陰影を好むのか。正面から撮ってくれればいいのに……。というわけで、しばらくは頭を悩ませる日々が続いていた。

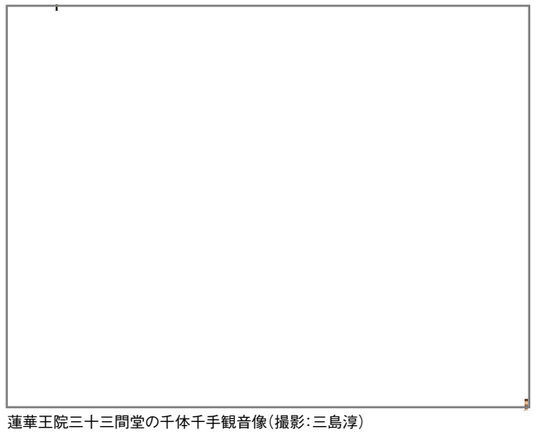
その折、前述の「京都における癒しの伝統とリソース」の一環としてバリ島ウブドに視察に行く機会があった。詳しい話は他の方々に書いていただけると思うが、生活の一部となっている工芸・彫刻に触れることで、〈モノ〉にこころを込めるという行動が人類に共通するものであるという確信を持ち、日本に帰ってきたときには、みんなでなんとかして調べる方法を考えなければと思うようになっていた。

バリ島の〈モノ〉たち（撮影：大石高典）

三十三間堂の千体千手観音像撮影

上に述べたように、仏像に限らず彫刻や絵画などを実験心理学での研究対象とする場合、その多様性が問題となる。ある仏像と他の仏像が表情・視線・姿勢など様々な点で大きく異なるだけでなく、撮影の角度・照明なども画像ごとに違う。でも京都には世界に名だたる「蓮華王院三十三間堂の千体千手観音像」がある。なにしろ同じものを作ろうとしてがんばったのだから、表情を持つ〈モノ〉としての仏像の視覚刺激として、これほど適切なものはないだろう。これを我々で撮影すればどうだろう。

……裏で表でいろいろな動きがあり、日本宗教界のネットワークにつながる某K田先主の菅原信海先生のご好意によって、仏像の撮影許可を得ることができた。このチャンスを逃すわけにはいかず、早速プロカメラマンの三島淳さんに撮影を委託し、アジア・アフリカ地域研究研究科の小山敦資さんに撮影サポートをお願いした。平成20年の9月、ちょうど満月だった閉門後の三十三間堂はひっそりとしていたが、撮影は一時も休むことなく続き、千体千手観音の内計48体の正面および斜め下からの角度の高解像度画像を、均一の距離・ライティングで撮影した。これらの画像は学術資料・データベースとして貴重な価値を持つだけでなく、心理実験や評定実験における視覚刺激としても、最も統制されたものと言えるだろう。さて実験だ！　まずは基本的な評定実験をやろう。その内容はまた稿を改めてということで、乞うご期待。



蓮華王院三十三間堂の千体千手観音像（撮影：三島淳）